

## interview

## 教えること / 教わること

地理歴史科教諭 藤原 雅史

## 史料から歴史をひもとく

——よろしくお願いします。

よろしくお願いします。

——藤原先生は日本史の何がご専門なのですか？

古代史です。大学時代は奈良時代の政治史を、大学院で制度史、つまり官僚のシステム、昇進・給料のシステムなどを研究していました。

——我々素人からすると、そういった古代はどんな時代なのか、そして史料にはどんなことが書かれているのかピンと来ないのですが…。

私は律令という当時の法から奈良時代を読み解いていきます。意外かもしれませんが、皆さんが思っているよりも非常に整えられたシステムです。実際にそれがどれくらい行われていたかについては様々な議論がありますが、奈良時代の前半までは比較的忠実に行われていたのではないかと考えられています。まあ、忠実にやろうとしていたというのが現実かもしれませんが。

——そういう「史料」というのは、きちんと残っているものなのですか？

写本が刊行されていますので、我々も見ることができます。

——最近では、教科書でも史料を扱うことが増えているようですが。

史料をたくさん扱って歴史を構築していく授業、というのがこれからの流れのようですね。

——藤原先生の授業プリントには木簡の写真や、史料の文字起こしや訳が載ってますね。私が高校生の頃はそういうものがなかったものですから…。

受験的な史料の解き方ではなく、史料から歴史を組み立てることがニーズとして求められているのです。史料を扱うことで歴史の認識には深みが出ます。例えば、源頼朝の死に関する史料を比べるだけでも、情報の混乱ぶりや狼狽する貴族の心境などが分かります。一方で教科書を進めるスピードは遅くなるので、悩ましいですね。





——なるほど。そういえば藤原先生はiPadを使って映像を見せたり、視聴覚教室の設備の拡充に関わったりしていますが、やはり視聴覚教材は生徒の反応も良かったりしますか？

iPadを使う前からも、教室に設置してあるテレビにSDカードを差し込んで、画像や動画は見せていました。今は本当に便利な世の中になったので、授業に必要なものをiPadに入れて授業に向かいます。この方が生産性も高いので、iPadひとつあれば、動画や静止画からスライドまで、何でもできます。歴史を視覚的に訴えるという意味ではとても便利になりました。人物の声や顔が伝わると、理解度も上がるのではないのでしょうか。昔は「手元の資料集を見なさい」と言うしかなかったり、プリントを配ったところで白黒印刷だったりでしたから。授業の幅は広がり、多角的なことができるようになりました。

——iPadの使い方も科目によって様々ですね。

英語であればオンラインでネイティブの発音を体験できる。数学もグラフを描かせるが簡単だったり。そういう意味ではどの科目の先生もこういうことをやることで、先生自身も自分の授業スキルの向上というか、幅というものが広がりますよね。

## 実は理数科出身なんです

——そういえば藤原先生は高校は理数科なんですね。

そうですね。挫折組です(笑)。まさにしくじり先生です(一同笑)。

——どういう経緯で日本史を志したんですか？

高校の時パソコンを購入し、「信長の野望」や「三國志」といったゲームにハマり、そこから漫画に入り、本に入り、完全に理系に興味を失ってしまいました。

——先生が高校生の頃、ちょうどパソコンが出だした頃でしたね。

PC8801とか、そこらへんですね。こんなでっかい(身振り)フロッピーディスクがあった時代ですから。親にねだって買ってもらったけど、プログラミングも何もせず、ゲーム専用機でしたね。よくある話です(笑)。

——理数科に所属しつつ、文系で大学受験をしたということですか？

理数科だったので隠れ文系でした。3年になると文系の授業は一気に少なくなります。まあしょうがないですね。だから一通り数学も理科も勉強しているんですよ。もちろん今は何もできませんが。



## ダンスとの出会い

——藤原先生と言えば、本校では「ダンス同好会」の顧問として認知されていますが、ダンスはいつから始めたんですか？

社会人になってからです。高校の時はやっていませんでした。確か本校に奉職して3年目で始めました。

——今こそダンスが踊れることは珍しいことではありませんが、当時だとダンスというのは本校では斬新だったのではありませんか？

当時、体育祭には「仮装行列」という種目がありまして、芳沢先生のクラスがラインダンスなんかをやって、特別賞の常連でした。この出し物を決めるのが大変で、何にするか、クラスで話し合ってもなかなか決まらない。だったら担任が「おい、やるぞ」と言ってしまった方が話が早い。そんな時自分のやってきたダンスは役に立ちましたね。そこが保善でのダンスデビューです。その後は文化祭で有志を誘って踊ったのがきっかけで、部活になりました。

——ダンス同好会で賞を取ったこともありましたよね。

あの頃は学校全体にダンスが広がり始めた頃でして、私も賞を取るためにかなり気合を入れて指導していましたね。当時はコンテストに出ても20校ぐらいなので、頑張れば入賞は射程圏内でした。審査員特別賞が2回、本選6位入賞がありました。今ではダンスというものが当たり前になっている時代ですから、当時の様にスパルタというよりは楽しく踊ろう、というスタンスでやっています。

——藤原先生ご自身は今でもプロレッスンに通ってますよね。

今年から担任ではないこともあって、レッスンを再開しました。ダンスを続けている理由は自分のスキルアップもあるし、老後に備えて足腰を鍛えておくというのがありますが、何より大事なのは「教わる」ことができる環境です。教師という商売は「傲慢な商売」だと誰かが言ってました。人にものを教えるなんて傲慢であると。やはり私はダンスを教わることで自分の関係がリセットされるというか、私もダンスで出来ないこともいっぱいあるので、そうするとできない生徒の気持ちもよく分かります。一方でそんな時ダンスの先生はどんなアドバイスをするんだろうとか、そういうのはとても参考になる。たくさん例え話をして分かってもらおうとする先生もいれば、逆に何にも言わないけど自分のダンスを見てもらって理解してもらおうとする先生とか、いろいろな教え方のパターンがある。教員にとってモノを習うという経験はどこかでやらないと、自分の教え方が広がって





いかないし、教えている自分をリセットする瞬間というのが、日常のどこかで必要だと思っています。自分が教わる立場になって気付くことがたくさんありますからね。

——振り付けなんかもご自身で考えてますよね。

まあ、振り付けはYouTubeからパクってくるので(笑)。もちろん自分でアレンジしますが。しかし良い時代になりました。昔はそもそもそういう動画を探すのも一苦勞で、レンタルビデオ屋で音楽のビデオを借りてこないと見られませんでした。あとは所属していたダンスチームがあったので、そこで作ったネタを使わせてもらったりとか。

——今、「パクる」という表現がありました。そういう型のようなものがダンスにはあるのですか？

どのダンスも基本的な動きはありますが、例えばヒップホップは自由度の高いダンスです。私がやっているロックダンスというのは、逆に決まった型が多く存在しています。日本人は空手とか柔道とか「型の文化」ですから、ロックダンスというのは日本人にハマりやすい。型を教われればそこから自分でアレンジもできますし。だから生徒に教えるという観点でもロックダンスの方が教えやすいんです。

——そういう振り付けというのはどうやって記録するのですか？

8カウントなので小さな棒人間を8個書いて、大体のイメージを簡単に書いておきます。フォーメーションは書かないと忘れてしまいます。人数が多くなると、誰がどう動くか、立ち位置が分からなくなってしまいますから。

——今日はたくさんの貴重なお話をありがとうございました。

ありがとうございました。

## voice はじまりの連立方程式

兄弟揃って保善生！というのが実は結構多い。今回は兄弟揃って特進クラス(しかも同じ担任)という、1年1組の辰元克将君にインタビューをしました。

### なぜだか特進にいた

——こんにちは。よろしくお願ひします。

お願ひします。

——思えば入学してから随分経ちましたが、コロナの影響もあって、こうやって二人きりで話をするのは初めてですね。

そうですね。



——今年3月に卒業したお兄ちゃんも私のクラスで、そしてお兄ちゃんを卒業させてすぐに弟さんが入学してきて私のクラスにいるなんて…

(笑)

——そもそも保善は第一志望だったの？

いいえ。保善は併願でした。最初は大進に入ろうとしてたんですけど、何だか特進に合格して…

——え？ 何で(笑)

試験の日に志望クラスに丸をつける欄があって、特進、選抜、大進の三つ書いてあって、あれにとりあえず全部に丸をつけました。

——そうしたら、特進で合格していた？

そうです。

——もともと特進に入ろうとはしていなかかったんだね？

入れるかどうか、試験前に分かっていませんでした。

——そうか、そうすると私が兄弟どちらも担任を受け持ったのは、本当に偶然だということになるね。

はい、そうです。

——お兄ちゃんからは保善の特進クラスについて何か聞いていた？

兄の体験談は色々聞きました。

——どんな所なのか、とかは？

男子校だよ、とか。

——なるほど(笑)

あと兄は最初大進クラスにいたけれど、2年時に特進クラスに移ったと聞きました。

——そうだったね。お兄ちゃん頑張っていたもんね。





—そういえば軽音楽部入りましたよね。

高校から始めました。

—きっかけは？

特にはないんですけど、部活の見学に行った時に楽しそうだなと思って。

—楽器は何でしたっけ？

ギターです。まだ全然できないですが楽しいです。コードとか最初は勉強しましたが、最近は動画で練習してます。譜面読めないんで。

## 兄が解いた方程式

—兄弟そろって担任受け持つのは、私は初めての経験なんだけれども、やっぱり君はお兄ちゃんとは違うね。

中学校の時も先生に同じことを言われました(笑)

—やはり君は数学の力、すごいよね。いつから数学に目覚めたの？

数学というよりは幼稚園や小学生の時からパズルが大好きで、折り紙やパズルばかりしていました。小学校四年生ぐらいの時に、家族で外食に行ったんです。その時お父さんが連立方程式の問題を出してきたんです。

—家族で食事している時に？

食事が終わった時です。最初見たときは全然わからなかったんですけど、それをお兄ちゃんが「こうすると答えが出るんだよ」って解いてくれて、それがすごいなと思って。そこで連立方程式って面白いなって思いました。

—数学を知ったのは連立方程式がきっかけだったんだね。

はい。最初は未知数に1を代入して、2を代入して、と探していたんですけども、全然分からなくて。それをお兄ちゃんがサッと解いて、なるほど、そうやって解けるんだと感心したんです。

—そこはパズル少年の君からすれば、お兄ちゃんに解かれてしまって悔しかったりした？

そんなことはなかったんですけど、すごいなと感心しました。



——とにかくこの連立方程式をきっかけに数学に興味を持ったということなんだね。

はい。

——数学検定も、先日高校一年生ながら 2 級(※受験目安は高校二年程度)を取りましたよね。

お兄ちゃんが理系だったので、お兄ちゃんの使っていた高校の教科書を使って勉強しました。

——ということは、数学Ⅱ(通常高校二年生で履修する科目)は一通り自学で勉強したのかな？

はい、多分ほとんどやったと思います。

——数学 B(これも通常高校二年生で履修する科目)もやったんだろうね。どうでしたか、数学Ⅱと B をやってみて。

数学Ⅱは大丈夫でしたが、数学 B は難しかったです。数列の階差数列のところや漸化式あたりが。でも漸化式は苦手ですが好きです。パズルであるじゃないですか、「ハノイの塔」とか。あれは漸化式で解けるので。

——君が数検の勉強をしている姿を見かけたことがあったけど、そのときは微分積分はすらすらと計算できていたね。

微積は最初、教科書を見てもよく分からなかったんですが、YouTube にあった動画がめちゃくちゃ分かりやすかったです。積分がなぜ面積を表すのかとか。

——なるほど。実は私も最近 YouTube で古典文法の動画見て勉強しているんですよ(※インタビュアーは数学の先生)。あれは自分にピタッとハマる動画があるとすごく面白いよね。

僕は整数問題が苦手なので、整数問題の動画をよく見ますね。

——気に入っているチャンネルは？

パスラボとか、ヨビノリとか、鈴木貫太郎とか…。

——数学系動画の王道ですね(笑)



## コツは、楽しさを見つけること

——二年では文系、理系、どっちを考えてますか？ 将来の夢とか。

理系に進みたいと思っています。あと将来は建築の方に進みたいと思っています。

——理系の花形学科ですね。昔から、そういったものを作ることが好きだったの？

そうですね。だから数学でも図形問題が好きでした。先程も言いましたが、折り紙折るのが好きだったし、あとダンボール工作が好きなんですよ。

——立体的に何か造形するのが好きなんです。

——自分の受験期を振り返ってみて「これをやっていたよかった」と思うことはありますか。

うーん…英語勉強しておけばよかったと思います。

——反省としてね。今でも英語は苦手？

中学一年生の時、英語がめちゃくちゃ嫌いで、基礎的な知識は何もなかったです。でも中学一年の後半にニュージーランドに留学したら、何か英語面白いなってなったんです。だから中学二年の時、英語を勉強したんですが、中一の時の知識がなさすぎて結構つまずきました。

——なるほど。後から英語は好きになったものの、中一の知識が空っぽだからうまくいかなかったんだね。

そうです。英語は最初の知識が大切だなと。「11月」とかいまだに英語で何ていうか分かってない…。

——(笑)では逆に得意科目の数学はどんな感じで勉強していたの？

数学は好きなので、数学の勉強をした後、休憩するんですけど、その休憩中に他の数学をやるんです。

——「他」っていうと？

自分の好きな範囲とか。

——そこまでくると数学が生活の一部になっている感じだね。数学が苦手な中学生というのは多いと思うけど、そういう生徒に何かアドバイスありますか。

やっぱり数学を好きになることですね。何か楽しさを見つけることだと思います。それと基礎と、考えることが大事だと思います。

——さっきの英語の話と通じるところがありますね。



## column 理科を学ぶということ

皆川 敦史



「自然という書物は数学の言語で書かれている」これは、かの有名な、ガリレオ・ガリレイの言葉です。この言葉を聞くと、水溶液の濃度計算や、物体の移動距離計算など、公式を覚えて、問題を解かなくてはいけないと思う生徒も少なくはないのでしょうか。

しかし、難しく考えすぎるのも考え物です。「数学の言語で書かれている」とあると、難しい数式を考える人が多いですが、実は、大切な数式であるほど、単純なことが多いです。具体例として、物が置いてあり、この物を押して動かす場面を挙げてみましょう。このとき、押す力を2倍にすると、移動速度も2倍になります。3倍にすれば3倍です（ただし条件あり）。このとき、押す力を  $F$ 、移動速度を  $v$  とすると、 $v=kF$  ( $k$ は比例定数) という数式で、物の動き方の特徴、今回でいうと、速さの特徴を説明することができます。あるものを2倍、3倍にすると、他のものが2倍、3倍になるという単純な数式も、数学の言語の一部です。

他の例としては、朝起きた時の体重が60kgであり、朝食を0.3kg、昼食を0.5kg食べて、お昼休みに体重を測ったら60.8kgであったとしましょう。朝の体重を  $x$ 、食べた分の質量を  $y$ 、昼休みの体重を  $z$  とおけば、 $x+y=z$  という式になります。もちろん、運動したり生命活動をしたりするので、その分減ることにより、この式は成り立たな



さそうですが、だったら減った分を  $w$  とでもして、 $x+y-w=z$  とすれば、式は成り立ちます。日本語で説明したら、「食べた分体重は増え、運動した分体重は減る」という当たり前のことが、数学だと「 $x+y-w=z$ 」という数式で表せます。こんな単純な足し算引き算も、数学の言語の一部です。

このように、身の回りに起きている現象について、日本語ではなく数字や数式を用いて説明することが、理科を学ぶということです。公式は、自然現象に対して、過去の偉人たちが一生懸命解明してくれたルールです。そこには、当然だと思えるルールもあれば、意外に思うルールもあります。ルールを理解しながらスポーツ観戦をすると楽しいように、数学で書かれたルールを理解しながら自然を見てみると、今まで見えてこなかった楽しみに触れることができます。保善高校で、自然界に存在するルールを学んでいきましょう。

【みながわあつし／理科教諭】